第９号

奈良県立大学情報誌

コモンズ

―学びの共同体―

■ 平成27年度奈良県立大学COCシンポジウム開催報告 …P1～2
■ 奈良市・富雄団地における居場所づくり
～持続可能なまちづくりに向けて…P3～4
■ 十津川村谷瀬集落での山村暮らし体験…P5～6
■ 平城ニュータウンにおける学外活動～地域経済コモンズゼミ
宇陀市特産品等認定審査委員会 …P7～8
■ 今年度のフィールドワークが始動！／県大生インタビュー…P9～10
■ 新任教員の紹介…P11

文部科学省
地(知)の拠点

平成 27 年度奈良県立大学 COC シンポジウム開催報告

伊藤忠通（奈良県立大学学長）

山本あつし
（クリエイティブ・イントロデューサー）

前嶋文典（NPO 法人申請団体
日本無形文化継承機構代表）

高津融男（奈良県立大学准教授）

平成 28 年 3 月 12 日（土）13 時～、地域交流棟 2 階中研修室をメインの会場として、平成 27 年度奈良県立大学〈地（知）の拠点整備事業〉シンポジウム『地域創造とコモンズ教育システムを考える～地域社会と学生・教員による「学びの共同体」の連携とは～』を開催しました。

このシンポジウムは、3 年目を迎えて折り返し地点に差し掛かった大学 COC 事業において、本学独自の学生・教員による「学びの共同体」であるコモンズが、いかに地域社会と向き合ってきたのか、改めてその成果を広く共有すると同時に、地域の方々と共に見つめ直し、今後のあり方を考えていきたいという主旨でおこなわれたものです。

冒頭、開会挨拶より幕を開け、第 1 部のパネリスト講演では、伊藤忠通学長（講演テーマ「まち・ひと・しごと創生総合戦略～人口減少時代の自治体経営～」）、クリエイティブ・イントロデューサーの山本あつし氏（講演テーマ「地域をおもしろくする、ということ」）、NPO 法人申請団体日本無形文化継承機構代表の前嶋文典氏（講演テーマ「『やまと』のローカルデザイン」）の 3 氏に、これからの新しい地域づくり・街づくりについて、それぞれの視点からのご講演をいただきました。

引き続いて、ご講演いただいた内容を踏まえる流れで、高津融男准教授をコーディネーターとし、パネルディスカッション「地域の未来と学習コモンズのとりくみ」へと進められました。

次に、各コモンズ所属の学生による地域活動の事例報告がおこなわれました。観光創造コモンズは明日香村、都市文化コモンズは奈良市、コミュニティデザインコモンズは桜井市、地域経済コモンズは宇陀市における、それぞれの地域活動の事例を発表しました。

本学の〈地（知）の拠点整備事業〉において、これまでどのような活動を通して地域社会と向き合ってきたのか、その多様な取り組みと成果の一端を地域の方々に対してご紹介することができたと思われます。

また、休憩を挟んでの第 2 部では、会場を移し 2 会場（1 号館 201 教室と 301 教室）に分かれて、奈良県立大学教員による「地域志向教育研究発表」（両会場あわせて 10 テーマ）が開かれました。

今後、本学独自の教育システムである「学びの共同体」コモンズをいかに進展させていけば良いのか、その方向性を考えるうえでも、極めて有意義なシンポジウムとなりました。

奈良県立大学生による地域活動の事例報告の様子

第３回 地域づくり連絡協議会、外部評価委員会を開催

地域づくり連絡協議会の様子

平成 28 年 3 月 25 日（金）、本学 3 号館協働サロンにおいて、≪地（知）の拠点整備事業≫（大学ＣＯＣ事業）連携 4 市村から各委員と本学 4 コモンズの代表教員参加のもと、平成 27 年度『第 3 回地域づくり連絡協議会』を開催いたしました。

地域づくり連絡協議会とは、平成 25 年度文部科学省の≪地（知）の拠点整備事業≫（大学ＣＯＣ事業）において、採択された奈良県立大学の「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」事業を実施していくにあたり、地域の声を集約整理し、実施で見えてきた課題や方向性について、事業実施関係者との協議をおこなうために設置された組織を意味します。これまでは、毎年度末に、活動報告会を兼ねて開催をしています。

冒頭、伊藤忠通学長より事業全般の概要説明があり、引き続き、事務局より本協議会に先立ち開催された「ＣＯＣ事業内部評価委員会」の結果についての報告がなされ、その後、４コモンズの各代表教員から今年度の活動報告の発表がありました。

外部評価委員会の様子

続いて行われた意見交換においては、４市村の委員から地域活動の問題点や来年度の取組についての要望等、熱心なご提言をいただきました。

本学の地域での活動に対する期待の高さがうかがわれ、今後の連携強化を相互に確認し、今年度の活動を総括しました。

また、平成 28 年 3 月 28 日（月）、同じく本学 3 号館協働サロンにおいて、外部評価委員会を開催させていただきました。外部評価委員会とは、本学のＣＯＣ事業の目標達成状況、事業の進捗状況について、大学外部の視点から評価をいただくために設置された委員会を指します。この場においても各委員様より、貴重なご意見を賜りました。

両会を通して見えてきた課題と、いただいた貴重なご提言を踏まえ、今後、本学ＣＯＣ事業を推進するにあたっての改善につなげてまいりたいと考えております。

奈良市・富雄団地における居場所づくり
～持続可能なまちづくりに向けて

大都市郊外のニュータウンや大規模団地などでは、急速な高齢化が進みつつあります。その中で、地域活力を維持し、持続可能なまちづくりを進めるため、地域の居住者をはじめ、各種機関、組織が連携・協働していくことが求められ、その拠点となる「場の形成」が課題となっています。平成 27 年度より、佐藤ゼミでは、そうした地域の方々が気軽に訪れ、自然な交流をはぐくむことができるような居場所づくりをめざした活動を実施しています。

■「いいばしょプロジェクト」への参加・協働

奈良市西部の丘陵地には、戦後の宅地開発により形成された郊外住宅地が広がっています。昭和 40 年代初頭に日本住宅公団（現・都市再生機構（UR））によって宅地開発・団地建設が行われた富雄地区では、まち開きから約 50 年が経過し、緑豊かな町並みが形成されています。その一方で、居住者の高齢化や子供世代の転出による人口減少等、計画開発住宅地に共通する課題が大きくなりつつあります。とりわけ、丘陵上部に立地する UR 富雄団地（1,664 戸）では、高齢期に入居する世帯の増加による高齢化の加速（高齢化率 31.8%）、若者も含め単身化の進行（全世帯の 46.4%：いずれも平成 22 年国勢調査）と、その傾向が顕著であり、コミュニティの維持と孤立しがちな高齢者等の支えあい活動の展開が求められています。こうした中、奈良市社会福祉協議会（市社協）の一部が、団地に隣接する旧鳥見幼稚園に移転し、平成 26 年から「安心生活創造推進事業」として、居場所づくり「いいばしょプロジェクト」が始まりました。

UR 富雄団地の風景

■ 居場所づくりの試行　～「ご当地カフェ」

地域の方に向けたプレゼンテーション

平成 27 年度、佐藤専門ゼミ（3 回生）の活動として、この「いいばしょプロジェクト」に参加しました。まず、団地自治会等、地域の主要な方たちからお話をお聞きしたり、鳥見地区社会福祉協議会（地区社協）が実施する「ふれあい食事会」に参加したりして、地域課題を探るとともに、地域の方たちとの協働関係を作っていきました。6 月には、「まんま」と名付けられたコミュニティスペースのあり方を議論する場で、地域の方たちに向けて、学生が自ら企画した「ご当地カフェ」をプレゼンテーションしました。これは、団地の高齢者の中に、県外の出身者が多いことに着目したもので、学生の出身地にちなんだ料理を提供し、関心を持ってもらおうと、企画したものです。9 月から、ほぼ月に 1 回のペースで、「ご当地カフ

ェ」と名付けたコミュニティカフェを市社協との共催等で実施しました。

カフェ開催には、毎回、企画検討、試作・試食、PR用のチラシ作成、協力いただく団体との調整等、イベントのプロセスすべてに学生が主体的に関わる形で実施しましたが、その際、市社協や地区社協の方たちには、学生たちへの助言や情報の提供、調整、広報や会場・機材の提供等、多大なご支援を賜りました。一連の企画は、地域から孤立しがちなひとりぐらしの高齢者等の来場を期待したものですが、それだけではなく子ども連れの家族等も来られ、毎回 30 ～ 40 人前後の方にカフェを楽しんでいただきました。

カフェの様子

この間、来場いただいた方たちとの会話のきっかけとして簡単なアンケート調査と聞き取り調査を実施したり、民生委員の皆様のご協力で、団地に居住するひとりぐらし高齢者の方を対象としたアンケート調査を実施したり、研究活動も並行して進めていきました。平成 27 年度最後のカフェでは、それら研究の成果を地域に還元するため、学生による報告会を開催するとともに、2 回生が主となり、来られた方たちに奈良の名物・葛を使ったスイーツを提供しました。このような活動を続ける中で、さらに地域の方たちや各種専門機関などとの連携も広がっていきました。

■ 持続可能な地域に向けた「多世代交流」の実践

お花見ツアーの様子

平成 28 年度は、新 3 回生主体で、対象を鳥見小学校区へ広げ、子どもや高齢者の多世代の交流をテーマに継続しています。4 月には団地内の桜の名所を歩いて回るお花見ツアーと手作りの団子をみんなで作る企画を実施したところ、多くの子供たちと母親、高齢者の方が集まり、なごやかに交流しました。7 月には団地を管理する UR との共催が実現し、団地内ウォーキングコースマップのお披露目と万華鏡づくりのワークショップを実施しました。これは、富雄団地初の「住宅」「福祉」と「大学」の連携事例となりました。

こうした活動は、地域貢献としてだけでなく、ゼミの研究テーマと一体的に取り組むことで、教育としての効果も得られています。卒業論文としてさらに地域の課題を追究する学生もいます。何よりも学生にとっては、リアルな「地域」に触れ、自ら考え、実践することができます。こうした活動経験が、将来、地域の中でリーダーとして活躍できる人材の育成につながるものと期待されます。

（コミュニティデザインコモンズ　准教授　佐藤由美）

十津川村谷瀬集落での山村暮らし体験

2011 年の紀伊半島大水害で甚大な被害をこうむった十津川村は、災害を機に新たな村おこしに取り組んでいます。その一環として「新集落づくりに向けた集落再生プロジェクト」が始動し、モデル集落として高森集落と谷瀬集落が選定されました。2014 年から奈良県立大学神吉ゼミと奈良女子大学室崎ゼミがこの谷瀬集落に通い、集落の人たちと一緒に活動に参加しながら、山村暮らしを体験させていただいています。本稿では、昨年度に取り組んだ活動について紹介します。

■ 日本酒プロジェクト

「昔はどこの家でもどぶろくをつくっていたよね。」という会話から、「よしっ、酒米を育てて日本酒をつくってみよう！」ということになり、日本酒プロジェクトがスタートしました。

5 年以上耕作されていなかった田んぼには雑草が鬱蒼と茂っていて、5 月にその草刈りからとりかかり、次にトラクターで荒おこしをして、畦板をはめこみ、水を溜め始めました。6 月に「吟のさと」という品種の酒米を植え付け。手植えではなかなかまっすぐには植えられず、また機械植えでは泥に足をとられて四苦八苦しました。10 月に稲刈りをし、480kg を収穫。乾燥・脱穀を経て、2015 年 2 月、吉野町の美吉野醸造協力のもと、集落の人たちと学生たちが酒の仕込み作業に参加。そして 3 月末に日本酒「谷瀬」が完成しました。既にほぼ完売する好評ぶりです。

今年度も田んぼの面積を拡大して酒米づくりに取り組んでいます。日本酒「谷瀬」が十津川村のブランドとして育ち、移住のきっかけになればと集落の人たちが期待を寄せています。

荒おこし ➡

田植え ➡

稲刈り ➡

酒の仕込み ➡

村役場で完成披露会

■ 蕎麦プロジェクト

米づくりには水の管理など日々目を配る必要があります。集落で暮さない我々にできることはないかと考えていたところ、「蕎麦ならば種を蒔いてから収穫するまで何もしなくても大丈夫。」という集落の人からのアドバイスをいただき、蕎麦を育てることになりました。耕作放棄地の草を刈り、荒おこしをして、畝をつくり、8 月に蕎麦の種を蒔きました。そしてほったらかすこと 2 ヶ月。10 月中旬に収穫し、1 週間天日で干しました。

実はここからが大変でした。棒でたたいて蕎麦の実を落とそうとしても、なかなか実が落ちてくれません。手箕を使ってゴミ屑等を吹き飛ばすのですが、我々がやると必要な蕎麦の実まで落ちてしまいます。ここで活躍してくれたのが、集落のおばあちゃん。「昔はうちでも蕎麦をつくってたんだよ。懐かしいね〜。」と言いながら、慣れた手つきでサッサッと手箕をあやつりゴミ屑を飛ばしてくれました。さすがです！石臼に数粒ずつ実を入れてすりつぶし、篩 (ふるい) で殻を取り除き、粉を石臼に戻してすりつぶし、さらに目の細かい篩 (ふるい) で殻を取り除きの繰り返し。集落の蕎麦名人に手ほどきを受けながら蕎麦を打ち、食事にありついた時には夜 9 時を過ぎていました。

蕎麦の種まき

脱穀

石臼で蕎麦粉に

■ 空き家再生プロジェクト

50 年近く空き家の状態で放置されていた空き家を活用して、観光客向けの休憩所をつくることになりました。石垣の上の板塀、谷を見下ろす建物配置、平屋建て、平入り、土間・だいどこ・なかのま・ざしき・なんど・えんで(縁側)で構成される間取り、そして十津川の重要な景観要素であるスバルノフキオロシなど、十津川らしい様式をもつ民家です。

集落の人たちで話し合い、建物の名称を「こやすば」(昔から長い道のりの途中でちょっと休むところを「小休場」(こやすば) と呼んでいた) に決定。集落の人たちと学生たちで家の掃除にとりかかり、50 年の間に積もった塵と埃や生い茂った雑草と格闘しました。

2015 年 9 月に休憩所「こやすば」として一日限定でオープン。集落内を歩く観光客に声をかけて、谷瀬集落でつくったゆうべしと高菜漬けとお茶を無料で提供。その日一日で 80 人の方に利用していただきました。今年のゴールデンウィークには、絵葉書教室、N ゲージ展、パッチワーク展等を開催。今後のさらなる活用方法について集落の人たちが検討中です。

外観

庭の草刈り

「こやすば」オープン

■ 活動を振り返って

米や野菜を育てたり、各家にあるお茶の木から葉を摘み煎って揉んで干してお茶を作ったり、梅干しやジャムを作ったり・・・谷瀬集落の人たちの手間暇かけた丁寧な暮らしづくりをちょこっと体験させていただく中で、我々の普段の暮らしに向き合う機会にもなりました。谷瀬集落の皆さん、ありがとうございました！　　(コミュニティデザインコモンズ　准教授　神吉優美)

平城ニュータウンにおける学外活動
~ 地域経済コモンズゼミ

平城浄化センター 見学の様子

2016 年 6 月 16 日(木)、小松原尚教授、津田康英准教授、藤森茂准教授、山部洋幸講師の引率のもと、「平城ニュータウンの環境整備と公的サービスについて考える」をテーマとして、地域経済コモンズゼミの学外活動がおこなわれ、地域経済コモンズの 2 年生 40 名ほどが参加をしました。

この日、踏査した平城ニュータウンは、日本住宅公団（現・都市再生機構（UR））により、大規模住宅地として開発されましたが、大阪圏へのベッドタウンとしての住宅都市であるとともに、国家プロジェクトの関西文化学術研究都市の一角も兼ねて、住環境のみでなく文化・学術・研究の中心としてふさわしい街づくりを目的に開発された住宅都市でもあります。

13 時に近鉄高の原駅に集合した地域経済コモンズゼミ生のこの日の活動は、その高の原駅近くにある全国的にも珍しい駅前の下水処理場である平城浄化センターの訪問見学からスタートしました。静脈系の都市インフラ整備の実態を「下水道システム」の見学を通して観察し、公的セクターによる公共サービスの質的・量的内容と存在意義について、各自で考えてみるということが目的です。

平城浄化センターでは、まず、私たちは生活に使用した水がどのような流れで再生されているのかという「下水処理システム」について、担当の方から実演も交え、詳しく教えていただきました。ほとんどの学生にとっては、初めて聞くお話だったので、「下水道システム」以外にも、現場で働いておられる方々の仕事の内容等、たくさんの質問をさせていただきました。

続いて、実際に施設の中を順番に歩いて回り、浄化システムの工程を見学させていただきました。先に説明いただいた内容を踏まえての見学であり、なおかつ専門的な用語についても丁寧に教えていただいたこともあって、平城浄化センターという施設について深く知ることができました。

次の目的地は、平城浄化センターから東に１０分ほど歩いたところにある音如ケ谷公園という都市公園です。現場へは奈良県と京都府の府県境沿いに、都市再生機構(UR)によって宅地開発が進む一帯を横目に歩きますが、そこでの景観の違いや変化を見るということも、この日のフィールドワーク学習の一環となっています。

音如ケ谷公園を視察地とした主たる目的は、平城ニュータウン開発の際に発掘された古代瓦窯跡の遺跡(音如ケ谷瓦窯跡)を都市公園として整備し、保存・展示している状況を見学するというところにあります。

当日はあいにくの雨模様で、体力的にもフィールドワークには厳しい天候ではありましたが、各自が問題意識をもって現場を歩き、多くの知識と情報を得ることができたと思います。そうしたこの日の成果を持ち帰って整理し、学生自身がこれまで地域創造学部で履修した諸科目の授業内容や地域経済コモンズの関連科目との関連性を、自分なりに考えをまとめていくことで、これからの学びにつなげていって欲しいと思います。

音如ケ谷公園内に展示されている
窯跡の遺構

音如ケ谷内公園内には
複数の窯跡がある

小松原教授より説明を受ける

宇陀市特産品等認定審査委員会

2016 年 7 月 4 日（月）14 時 30 分より、宇陀市役所 3 階庁議室において、宇陀市特産品等認定審査委員会が開催されました。本学からは、昨年 12 月に開催された同委員会より、委員を務めている県大生 3 名（伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん）が出席しました。

この委員会は、宇陀市の農産物を活用した新製品の開発事業や、宇陀市内業者が行う販路拡大事業に対して経費の一部を補助する「うだチャレンジアシスト補助事業」と、市を代表する特産品、優れた商品の名産品を認定する「宇陀市特産品等認定事業」の二つの事業において、申請のあった案件に対して、補助または認定をするのがふさわしいか否かを審査する委員会です。

申請品の試食をする県大生
（左から稲垣昭則さん、伊島萌乃さん、仲健一さん）

この日は、「宇陀市特産品・名産品認定申請 10 件（特産品 1 件、名産品 9 件）」、「チャレンジアシスト補助金申請 7 件（開発 3 件、販売促進 4 件）」の申請内容について、審査ならびに協議に加わらせていただきました。

地域の方々からは、「大学生の視点からの審査」ということで本学学生に期待されているところも大きく、委員として参加することに感謝をしていただいておりますが、本学学生からすれば、地域や行政が地元の産業振興を図るために、どのような流れで特産品化・ブランド化を推し進めていくのか、その取り組みや流れの一端を知ることができるという意味でも、非常に貴重な経験をさせていただいております。

『宇陀市 特産品・名産品ブック』

今年度のフィールドワークが始動!

県大生がキャンパスを出て、地域、企業等の学外において、自主的に調査・交流・研修等の活動をおこなうフィールドワーク科目（コモンズ共通科目）。昨年度からスタートしたこの学習カリキュラムに、今年度から新たに２年生が加わり、地域を学びの場として活動をしていきます。また、３年生はより一層、自身の地域での取り組みを深めるかたちで、新たなフィールドに展開しています。

■ 東アジア文化都市 2016 奈良市

日・中・韓の３カ国が各１都市を選定し、さまざまな文化交流を行う「東アジア文化都市」が、2016 年は奈良市で開催されます。舞台芸術・美術・食を中心に展開され、市内八社寺やならまちで展示されるアート作品の解説、イベント期間中のインフォメーションサロンの運営など、共に事業を作り上げていくサポーターとして参加予定です。現在 11 名の県大生が活動中。現在もサポーターは募集しています。

学内説明会の様子　於）協働サロン

■ エコライフかしはら・リサイクル館かしはら

説明会の様子　於）かしはらナビプラザ

次世代のために住みよい地域を目指し、環境活動を展開している「エコライフかしはら」。県大生は、地域や行政の方々と一緒に、環境に関するイベントづくりにおいて、活動のお手伝いをします。

また、橿原市内の環境教育・活動の拠点の一つである「リサイクル館かしはら」では、ゴミ処理施設の事業について学ぶことから始まり、外部出展イベントへの参加、広報活動、新しい「リサイクル教室」の考案に取り組んでいく予定です。

■ 第１回 春日野音楽祭

春日大社第 60 次式年造替を契機に、様々な音楽を御神山御蓋山に向けて奉納しお祝いする春日野音楽祭（2016 年 9 月 18・19 日の開催）。その学生運営サポーターとして県大生数名が運営に参加しています。

5 月 29 日（日）に開催された初回のワークショップでは、まずは、「春日大社を知る」ということで現地を訪問。神職の方に境内を案内していただき、参拝しました。以降、定期的に開催されるワークショップを通して、本番のイベント成功に向けて地域の方々と力を合わせていきます。

第１・２回ワークショップの様子

地域でのボランティア活動に参加してみて
～県大生インタビュー～

奈良県立大学3年生
地域経済コモンズ
稲田　達也　さん

今号では、フィールドワークに取り組んでいる県大生の代表として、稲田達也さんにインタビューをしました。稲田さんは、奈良県警察本部の大学生を中心とした防犯ボランティア団体「あっぷりけ戦隊！奈良まもりたい」に１年生の時から参加。２年生からは本学のフィールドワーク科目として取り組みを続け、現在は、同団体の副代表として活躍中です。

Q. 活動をしてみたいと思ったきっかけは？
A. 率直に言えば、警察官になることが夢だったからです。大学生になって自由な時間が増えたので、なにか将来の糧になることがしたいと思ったのもきっかけですね。

Q.「あっぷりけ戦隊」での活動内容は？
A. 主に各地域の警察署のイベントのお手伝い、又は大学生メンバーが中心となっていろんなイベントを企画・運営したり・・・がメインの活動です。

Q. 実際に活動に取り組んでみての感想は？
A. やっぱり一番はやりがいですかね。地域の人々に「ありがとう」と言われた時や、防犯活動をすることで、実際に犯罪を少しでも減らせているということに、とてもやりがいを感じます。これは僕の場合ですが、警察官という職を身近に感じることが出来たのも良い経験でした。

Q.「あっぷりけ戦隊」のメンバーは何人くらい？他大の学生さんと一緒に活動して感じたことは？
A. 実働人員は平均で 30 ～ 40 人ってとこです。他大学との交流はとても良い経験になっています。初対面で意見交換やプレゼンをしたり、協力して活動することで、コミュニケーションや社会生活で役立つ能力が鍛えられているなって実感できています。

Q. たくさんのメンバーを代表と一緒に引っ張っていくのは大変ではないですか？
A. 正直なところ、結構大変です。活動はもちろんのこと、月に一度の定例会でも隊員たちをまとめるのは難しいです。大学も違えば、年齢も違う学生が 30 人くらい集まるわけなので、なかなか意見も一致しない時もあります。でも、なんだかんだで最後は、不思議にうまくまとまって楽しく活動できています。

Q. 活動を通して成長したなと思うところは？
A. やっぱり、コミュニケーション能力と協調性はかなり身についたと感じます。あと、地方からの講演依頼が来て、大勢の人の前で話をしたり、警察署の方々と打ち合わせをしたり・・・貴重な経験を積むことができたと感じています。

Q. これから地域活動に取組む後輩に何か一言！
A. これから地域活動をおこなう皆さん！最初は誰でも不安ですが、積極的に地域に出て地域と関係を築いていくことは、絶対に自分のためになります！大学生活が充実します！輝きます！

Q. ありがとうございました！これからも地域活動、そして、将来の夢に向かって、頑張ってください！

新任教員の紹介

※ 平成 28 年度学生便覧教員名簿順に表記

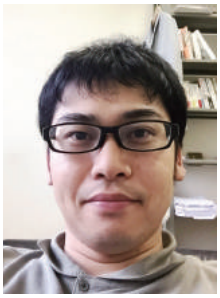
水谷 知生　教授（観光創造コモンズ）

「景観論」、「自然資源論」、「環境と社会」の担当です。３月までは環境省で自然保護に関する仕事をしていました。国立公園の現場の作業から霞が関での制度づくりまで多様でしたが，世界遺産にある原生的な自然から，人が暮らしてつくってきた農山村の自然まで，常に自然の風景が仕事の対象でした。自然の風景も変化しますが，人による自然の風景の見かたや「見るべき」とされた風景も，時代によって変化します。時代時代の人が自然の風景をどう捉えてきたのか，が現在の研究テーマです。また，美しいと感じた自然の風景を後代に継承していくことは，意外にむずかしいのです。自然の風景をみながら，そんなことをみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

大槻 きょう子　講師（語学）

このたび英語の教員として着任しました大槻きょう子です。専門は英文法と、ことばがそれぞれの状況の中で使われる際の意味を考える語用論という分野で、談話分析の手法で研究をしています。文法は苦手だ、文法を知っていても英語を使えないという声をよく聞きますが、そもそもことばはその場その場のコミュニケーションに最適な語句・文法構造を選んだ結果の産物です。文法はこの使用例を体系化したものなので、実際の運用を反映しており、考えられているより実はもっと実際的なものです。この「最適な文法」を体得するため、授業では多読学習を取り入れています。英語の本をたくさん読んで実際の状況の中で使われる英語に触れ、自然な英語の使い手になりましょう。

山部 洋幸　講師（地域経済コモンズ）



経営戦略論と経営組織論を担当している山部洋幸です。私の研究テーマは世界のローカル市場における現地経営とそこで生まれるアイデアがグローバルで活用されることに着目して研究を行っております。現地の会社で社長をされていた方にインタビューをする時、現地の人材についてのお話をききますが、印象深いのが、英語だけできる人が海外に駐在しても、通用しないということです。その社長は、「現地でビジネスをさせてもらっているという気持ちで、現地の文化や習慣を理解し、適応し、信頼を得ないといけない。ただし、あなどられないように。」という趣旨のことをおっしゃっていました。これは外国の話に限らず、我々の社会の場面でも必要なことといえます。学生の皆さんには多様な視点を持ちながら物事を論理的に把握し、洞察力を身に付けてもらえるよう教授したいと思います。

奈良県立大学
〒 630-8258　奈良市船橋町 10 番地
℡ 0742-22-4978 / FAX 0742-22-4991
お問い合わせは 月曜日～金曜日の午前 9 時から午後 5 時まで
http://www.narapu.ac.jp/

奈良県立大学大学情報誌 Vol.9（2016年7月29日発行／発行：奈良県立大学地域交流センター地域交流室　℡0742-93-7022）